

栃木県の農業の功労者

二宮尊徳(金次郎)－農村復興の指導者(真岡市)－

二宮尊徳(金次郎)は、1787年(天明7年)に今の神奈川県小田原市に農家の長男として生まれ、36才の時、小田原藩主の大久保忠真から桜町(現在の真岡市二宮)の復興の命を受けました。

尊徳は田畑や家財をすべて売り払い、「一家を廃して万家を興すなり」という不退転の決意で、1823年(文政6年)に一家そろって桜町陣屋に移り住みました。以来、毎日早朝から夜遅くまで、まさに「至誠」の文字のごとく粉骨砕身で復興のために努力しました。徹底して領内の実情を把握し、農民たちの勤労意欲を高めるための表彰、荒地の開墾、堰や堀などの治水の整備など……。

しかし、それは困難の連続でした。尊徳のやり方に不満を持つ人々や一部の役人による妨害などで、復興事業が行き詰った7年目の1829年(文政12年)、尊徳は成田山で21日間の断食を行いました。尊徳が不在となって、村民は改めて桜町における尊徳の存在の大きさを知り、これを境に村民や役人たちの気持ちがひとつになり、桜町の復興は順調に進展しました。

その後、幕府の役人となり、1853年(嘉永6年)に今市(現在の日光市今市)の荒廃した村の立て直しを任せられ、今市に移り住みました。農業用水路の整備や杉・ひのきの植林の奨励など、村づくり、人づくりに力を注ぎました。



桜町陣屋跡(尊徳が26年間住んだ家屋)
(真岡市二宮)



二宮金次郎像(道の駅にのみや)

印南丈作と矢板武－那須野が原の開拓者(那須塩原市)－



印南 丈作



矢板 武

那須野が原は栃木県の北東部に位置し、那珂川と箒川に囲まれた砂や小石が堆積した扇状地で、雨や川の水はすぐに地下に浸透してしまい、飲水の確保も難しい地域でした。

この原野の開拓に立ち上がった中心人物が、印南丈作(1831年(天保2年)日光市生まれ)と矢板武(1849年(嘉永2年)矢板市生まれ)の二人でした。

二人は、この原野を開拓するには、まず飲み水用の水路が必要と考え政府に願い出ました。自分たちが費用を出しても実現しようとする二人の熱心な思いが通じて、国が1881年(明治14年)に工事を開始し、1882年(明治15年)に約15kmの飲料水用の水路が完成しました。

次に、二人は、農業用水路の建設も必要と考え、上京すること6回、滞在期間のべ238日にもわたり、ねばり強く政府に※疏水の必要性を訴えました。そして、ついに1884年(明治17年)国費による工事が許可され、1885年(明治18年)に工事が始まりました。工事は、1日平均115mというものすごいスピードで進み、わずか5ヶ月間で16.3kmの日本三大疏水のひとつに数えられる那須疏水が完成しました。

その後、那須疏水は発電等への利用や黒磯駅で蒸気機関車の給水源になるなど、地域の発展に大きな恩恵をもたらし、那須野が原は、現在では水の豊かな台地として県内でも有数の豊かな稲作地帯となりました。

※疏水とは、土地を切り開いてつくった水路のこと。



那須疏水(那須塩原市)
(写真提供:那須塩原市那須野が原博物館)

仁井田 一郎－栃木県のいちご栽培の功労者(足利市)－



仁井田 一郎
(仁井田家提供)

仁井田一郎は、1912年(明治45年)足利市に生まれ、いちご栽培の導入やいちごの新しい栽培方法の開発など、栃木県のいちご栽培の基礎を築きました。

戦後の本県の農業は稲作が中心でしたが、農業所得を向上させるための商品作物として麦、麻などの栽培が行われていました。しかし、価格の低迷や化学繊維の進出などによる需要の減少などから農業経営は深刻な状態でした。このような中、仁井田一郎は農家の所得を向上させるための新しい作物として、いちご栽培の導入を提案し、当時栽培が盛んだった静岡県や神奈川県を訪ね、必要な情報を収集し、県内の自然条件にあわせた栽培方法の研究などに取り組みました。

仁井田一郎のいちご栽培への取り組みが新聞等で報道されると、彼のもとには関心のある多くの人たちが訪ねてきました。彼は、どのような時も喜んでいちご栽培の方法を教えたとともに、市場の開拓にも力を入れ、東京に加え、北海道への出荷、新潟市場の開拓などを成功させました。

仁井田一郎が根付かせたいちご栽培は、県内各地に広がり、「女峰」や「とちおとめ」などの新品種の導入につながり、栃木県のいちごの生産量は1968年(昭和43年)からずっと日本一を誇っています。